



# ピッポ新聞

2008

8

No.234

年間購読料 ( 送料込み ) 1500 円

編集・発行 伊藤俊男

子どもの本専門店

## ピッポ

〒424-0886 静岡市清水区草薙1-6-3

TEL &amp; FAX 054-345-5460

URL <http://www.pippo.co.jp>E-mail [itoh@pippo.co.jp](mailto:itoh@pippo.co.jp)

## ピアンキの名作『くちばし』 二つの版の謎をとく

第三回

動物学者 今泉吉晴

詩人・ナチュラリスト

ピアンキに出会う

今回は、『だれのくちばしが もっといいか』の残りの三つの節 すなわち第八節「ペリカン」、九節「キツツキ」、そして十節「結び」のうち八節「ペリカン」をあつかいます。

原稿にとりかかった当初は、三つの節を終えるつもりでした。ところが、「ペリカン」にとりかかっているうちに、現在、福音館書店が刊行している田中友子氏訳による『くちばし』どれが一番りっぱ？』の「ペリカン」の項に、重大な事実誤認（ペリカンはくちばしに魚を貯える、と訳している）があるのに、それに触れずに先に進むのはよくない、と思えてきました。

というのは、私はすでに2006年の春に問題に気づいていましたが、同書の巻末にある編集部のコメントに、ピアンキの執筆当時（1924年）はそう考えられていたとあって、確認に手間取り、誤りを明らかにする機会を失していたからです。

これから詳しく論じていきますが、編集部のコメントは事実誤認の責任を、訳者ではなく著者ピアンキに帰すものです。読者に誤解をあたえ、作品を読み誤らせる恐れが大きいのです。すでに終えた七つの節の検討から、オリジナル版は簡潔に鳥のくちばしと自然の関連を物語る詩のような文章であり、ナチュラリスト、ピアンキの素晴らしい自然体験が言葉になつた力強い作品、と分かってきました。

作品を読みすすめるうちに、どんな人が書いたのか、と思うことがあります。私は『だれのくちばしが もっといいか』の著者、ピアンキは自然の体験が豊かで、語り伝えたいことが山のようにあった、大きな人と確信しました。作品を読んでどう感じるか、著者をどう見るかが、今回の「ペリカン」の解釈にかかわっています。

### ピアンキは生きた言葉で描いた

さつそく第八節「ペリカン」の項にとりかかりましょう。この項もわずか数行の簡潔な言葉で、ペリカンのくちばしの使い方と漁の場面の関連を描いています。飛躍のある文章で、繰り返し読むうちに、著者からペリカンとの出会いのお気に入りの一面面を紹介してもらっているかのように、ペリカンが魚をとらえるさまが生き生きと伝わってきます。この項は、オリジナル版と簡略版はほとんど同じで、後者の最後の文章8の末尾に！のマークがあるだけの違いです。

1で、「フクロハシ ペリカンが みずうみから さげびました」とあって、ヒタキたちの一

行にペリカンから声をかけてきた、と分か  
ります。ペリカンは声がとどく岸辺の近く  
にきています。

2で、ペリカンは「小虫をつかまえて喜ん  
でいるなんて」と、ヨタカの狩りの方法に  
ケチをつけて、ヒタキたち一行の注意をひ  
きます。

3で「(君たちは)魚をくちばしの袋の  
底に沈めて溜めるってことはできそうもな  
いね」と、と食物を手に入れる技を自慢しま  
す。どんなふうにして沈めるのか、想像す  
るのがちょっとむずかしい言い方ですが、  
「ヨタカ」の項で夜空を群飛する虫を集め  
て捕らえる、アミハシの技を知ったばかり  
の読者は、魚を捕らえる特別な機能がくち  
ばしの袋にはありそう、と期待して読み進  
めるでしょう。

ペリカンは体重が15キログラムにもなる、  
水鳥としては最大級の大きさで、たくさん  
の魚を捕らえないと、生きていけません。  
それには、フクロハシという際立った特徴  
を使いこなすことが大切です。3では、ま  
ず漁の仕方の概略を説明したことになります。

ここで「(くちばしの中で魚を)沈めて  
溜める」と、私が訳した動詞、

は、英語で *set aside* (脇に置く) (並べる)  
とか *set aside* (脇に置く) の意味です。  
砂金を水といっしょに採って、沈めて集め  
るのと同じことで、魚を水から切り離して  
行動の自由をうばい、横にして並べる、と  
か、置くとかする、ということとです。また、  
この言葉には沈殿する、という意味もあり

ます。

くちばしですくった魚を水から分離して  
初めてペリカンは魚を捕らえたことになり  
ますが、水をゆつくりくちばしの袋からす  
てて、魚は底に集めて溜める、という捕獲  
の方法をビアンキは独創的な沈殿のイメー  
ジで表現して、読者が想像力をはばたかす  
ことを期待したのでしょう。

### 自分の体験に重ねる

私は子どもころ夏のセミ捕りを心待ち  
にしていました。母に手ぬぐいをぬって袋  
にしてもらい、庭の竹を切って針金の枠で  
とめて袋網を作りました。そして網を手に  
毎日、街路を巡り歩いてセミを求めました。  
竿の先の袋網を木にとまって鳴くセミにゆつ  
くり近づけ、最後は一気に背中からかぶせ  
ると、飛び立ったセミは袋網の内側にあたっ  
て、袋の底に落ちました。

こうしてあわれなセミは空から分離され  
袋網の底に沈殿して、私のものになったの  
です。数十年前の子どもの頃のセミ捕りの  
思い出を、私はビアンキのペリカンの項の  
記述からこのようにイメージしなおしまし  
た。

「媒体から分離して横たえる」、「沈殿  
させて逃さない」、これが魚を袋網で捕ら  
え、升で砂金を採取する方法の原理です。

4は、3で概略を伝えたフクロハシの原  
理を漁の現場で使う場面の記述です。フク  
ロハシですくいとっては、沈めて袋の底に  
溜め、またすくっては底に溜めます。そし

### 第八節 「ペリカン」の項

- 1 きみたちは そろいもそろって 小もの  
だね! と フクロハシ ペリカン が  
みづうみから さげびました。
- 2 小虫を つかまえて よろこんでいる  
なんて。
- 3 君たちは すくいとった魚を くちばしの  
袋の底に沈めてためるってことは できそ  
うも ないね。
- 4 わたしは くちばしに 水といっしょに  
さかなを すくいとっては 水だけすてて  
ふくろのそこに ためるんだ。そして  
また さかなを すくいとっては ふく  
ろのそこに ためるんだよ。
- 5 ペリカンが 大きな上のくちばしを あげ  
ると ふくろの なかに さかなが ぎっ  
しり つまっていました。
- 6 なんと ものすごい くちばしではないか!  
と ヒタキが おどろきの 声を あげま  
した。
- 7 まるで たべものの そうこみだ!  
そんな べんりな くちばしがあるなん  
て だれにも 考えられないね。(!)

「ペリカン」の項の文章は、オリジナル版と簡  
略版のロシア語原文は同じです。ただし、簡略  
版の8の末尾に「!」があります。

て、袋の底を魚でいっぱいにしていきます。このピアンキによるペリカンの魚の捕らえ方の説明の特徴は、人がたも網で小魚の群れをすくうのと、同じことをペリカンがしている、というアナロジー（相似）です。たも網で小魚をすくいとる人は、小魚を網に入れただけでは捕った、とは思えませんが、水からあげて小魚の泳ぐ能力をうばい、無力にしたところで、捕ったという達成感がわき上がります。

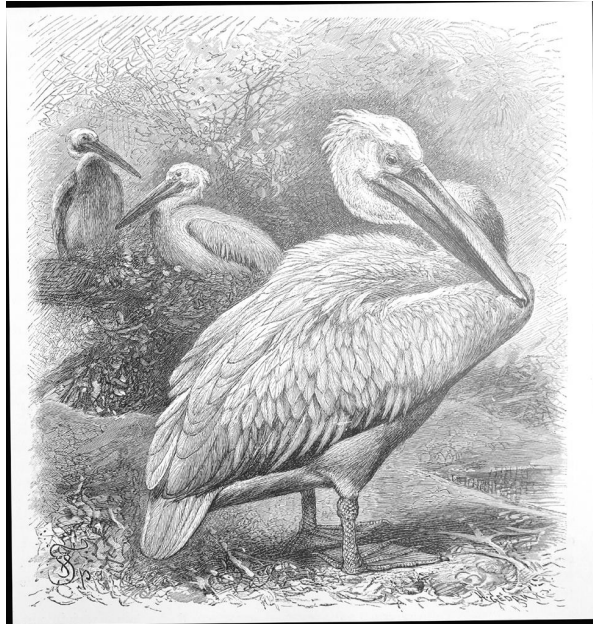
同じようにペリカンも、フクロハシで小魚をすくいとっただけでは、捕ったとは思わないでしょう。水をだして（たも網と違い袋網は水を出すのに時間がかかります）、小魚を泳げなくして袋の底に横たえて初めて捕った、と手応えを感じるでしょう。

しかも4の文章は、ペリカンが水とつしよにすくいとった魚を水だけ吐き出して袋の底に集めて捕らえた後も、すぐには飲み込まず、さらに魚を水とつしよにすくいとって、溜める、というペリカンの漁の実際の様子を伝えています。

## ライデッカーの「自然誌」

私が信頼するリチャード・ライデッカーは名著「自然誌」で、ペリカンは仲間どうしで協力しあい「ヤード（90センチ）ほどの間隔をとって馬蹄形に並び、隊列を組んで魚の群れを岸辺近くにおいあげ、そして、すくいとり、と書いていますが、それは仲間どうしの協力を注目したからでしょう。驚くほど統制のとれた行動をとる、と書

いています（The Royal Natural History, 1922年）。ペリカンは魚を追集めるのに協力しあっても、いざ魚をすくうとなったら、お互いにライバルです。たくさんの魚が目の前にいる状況では、ペリカンはすぐには魚を飲み込まず、つぎつぎにすくいとって、袋に



ライデッカーの『自然誌』にあるヨーロッパペリカンの挿絵。分類学者の監修を受けた優れた細密画で、くちばしの先端に角質の鉤型の突起が描かれている。ペリカンはこの突起で、小魚の群れを追ってくる大きな魚をひっかけて捕らえる。ピアンキは、日々決まった時間にあらわれる小魚の群れの捕らえ方を描いている。（The Royal Natural History, Vol. 4, 1922）

魚を溜める、と4でピアンキは言っています。人もまた、たくさんの小魚を前にすれば、たも網をつぎつぎにくりだして獲り溜めようとすると、同じでしょう。

つまり、3と4の文章の全体がペリカンによる魚の捕らえ方、すなわち、大量の魚を捕らえる獲物捕獲行動の説明になっています。ヨタカによる群れごとの獲物の捕らえ方に匹敵する、フクロハシの使い方がペリカンにはある、とピアンキは言っています。

私たちは、人の網の使い方や獲物の捕らえ方と動物の獲物捕獲行動をくらべて動物も同じなのだ、と理解します。それは大切なアナロジーですが、同じといっても人の方が上、という先入観が入ってしまいがちです。

ピアンキが動物に共感する姿勢は「動物も同じ」を越えています。私はかつて手ぬぐいの袋網でセミを捕ったことを思い起こし、なるほどそれは沈殿だったと理解しましたが、ピアンキがいつているのは、ペリカンは同じことを生命のない布袋ではなく、筋肉も神経もかよう膜でできた大きな生きた袋を使っているのであり、器用にうごく舌もあるフクロハシなのだ、という事実の直視です。

ペリカンがたくさんの魚をフクロハシの底に沈めて横たえた手応えを語るのには、体の外の道具を使う人間の狩りや漁の喜びを遙かに越えた野生の喜びであり誇りだ、とピアンキはいつています。

5は、ペリカンが上のくちばしをあげ

て、袋の中を見せてくれた、というおそらくは漁をしながらの行為を想定しているでしょう。

6と7はヒタキの感想です。6はくちばしの袋の働きへの賞賛、7は袋の底に整然と並んだ大量の魚を見た印象を表現しているでしょう。8は、ペリカンの袋くちばしの働きのメカニズムを讃えた言葉になっています。

以上のとおり、ヒタキのもっとよいくちばしを訪ねる旅は、ペリカンのくちばしに出会ってよいよ盛り上がった感があります。ピアンキはペリカンの項でも、簡潔な記述でくちばしの見事な形態と機能を表現し、すみ場所の自然との関連を示唆しました。

## くちばし倉庫説の誕生

しかし、『くちばし どれが一番りっぱ?』の「ペリカン」の項を読んでおられる方は、田中友子氏が違う訳をしており、その訳に基づき、編集部が巻末で違うピアンキの評価をしていることを思い起こされるでしょう。

私はすでに刊行されている日本語訳には、このオリジナル版と簡略版の読み比べを終わってから触れるつもりでしたが、ペリカンの項についてはピアンキの評価に関係しており、ここで訳と評価の違いをもたらししている理由を検討して、可否を論じておくことが大切、と思いました。

問題の発端は、田中友子氏の訳が作品の文脈を読み誤って事実誤認になっていることです。編集部の対応が問題を複雑にしました。校閲者の指摘が生かされていません。そして、現に子ども読者がそうと知らずに読んでいる、という見えない実態があります。そこで、以下のように順を追って考えていきます。

- 1 問題の発端 いざというときの貯え
- 2 編集部の対応 先訳と照らし合わせたのでしうか
- 3 校閲者の意見 誤りは指摘できたが、貧弱な論拠
- 4 元の木阿弥の編集部 混迷を深める
- 5 読者はどうなる 私も読者

### 1 問題の発端

#### いざというときの貯え

最初に田中友子氏の訳文を見てみましょう。簡略版から訳していますが、すでに確認したとおり、この項はオリジナル版と原文は同じです。

虫をつかまえたからといって、よろこんでいてどうするんだね。(2)  
それでは いざというときのためのたくわえができないだろ。(3)  
わしはな、魚をつかまえたらくちばし

のふくろにいれてとっておくのさ。(4)  
まあ、なんてりっぱなくちばしなの！  
まるで食べものの倉庫みたいね。こんなくちばしが あるなんて 考えたこともなかったわ。(8)

要点を先に見ます。3と4が、ペリカンのくちばしの機能の説明です。その要点は3の「いざという時のための貯え」で、私の解釈では「溜める」である

を「貯え」として、食物の貯蔵の説明になっています。訳者はその前に「いざという時のための」という言葉をくわえて、食物の貯蔵という意味を読者にはつきり伝えようとしています。

いったいペリカンの大きな袋が食物の貯蔵器官という解釈をまともな受け入れていいのか、それはただの思いつきではないのか、ということ。くちばしに魚を貯えてどうするの、という質問にこたえることができるか、です。

4は、魚をつかまえたらくちばしの袋にとつておく、と貯え方を説明しています。「魚をつかまえたなら」とは、「魚をすくいとつたら」であろう、と想像できます。でも、水の中の魚をどうやってくちばしの袋に入れる、のでしょうか。水をこぼしてふくろの底に集める、とは想像できませんが、原文にある同じことの繰り返し(とつては溜める)の表現は消えていて、どれくらい量の魚が獲れるのか、分かりません。  
8に「まるで食べものの倉庫みたいね」

とあるので、結果的に大量の魚が袋に入っている、と分かります。全体として言えることは、捕っては溜め、捕っては溜める、という魚の捕り方の説明である文章が、大量の食物を一気に貯える倉庫、の説明になっています。

どうやって捕るのか、なぜ一気に大量の食物を確保できるのか、その方法は繰り返し省かれていて、分かりません。「まあ、なんてりっぱなくちばしなの!」という言葉葉を付け加えるために、省いたのかもしれない。

世界に類例のないペリカンのくちばし倉庫説が、こともあるうにピアンキの着想として生まれたことになりました。後にペリカンの漁をする場面の観察例を参照しますが、生態の記録はアリストテレスからあり、特に十八世紀から二十世紀の初頭にかけて、すばらしい記録がたくさんあります。

ライデッカー（前出）は、インドでは川や沼地にペリカンの巨大な群れがふつうに見られる、と書いて、数マイルにわたる群れを見たというヒュームの観察を紹介しています。大量の食物をくちばしの袋に貯蔵したら大きく膨らむでしょう。一日中くちばしの袋を大きくしたペリカンを見て記録している人は一人もいません。すなわち、くちばし倉庫説の実際を見た人はいない、と言えます（ただし、私は福音館書店書籍編集部長に、このことにふれた資料があるなら教えてほしいと要請しています）。

この事実は、このあとの全ての問題の発端ですから、強調しておかなければなりません。

せん。詩人・ナチュラリストであったピアンキは、言葉のニュアンスを巧みに紡ぎ合わせて、ペリカンの習性を的確に表現する詩的な文章を書いています。

しかし、翻訳する場合は、ペリカンの習性を知らなければ、一つ一つの単語の意味を推し量り、微妙な言葉の連なりを再現することは難しいでしょう。そこでリファレンスが必要になります。

### 「貯える」と「溜める」

以上のとおり虚構とは思いますが、くちばし倉庫説が出現しました。そこで最小限の批判をおきます。編集部も倉庫説そのものは間違いと認めていますので、ここに書くのは、認めながら誤った訳のままにしていることに対する批判です。

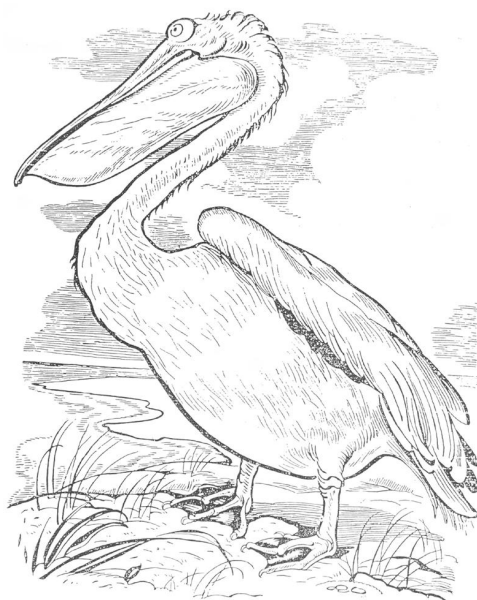
まず、「貯える」と「溜める」の違いです。

「貯える」と「溜める」は語感が似ていますが違います。溜めるとは、岩からぼたぼたたりとしたり落ちるわずかな水を、バケツに受けて溜め、日々の飲み水や洗いにする、といったような場合に使います。貯えるとは、そうして溜めた水を別のバケツに移して山頂の山小屋に運びあげ、いつでも使えるように、暗所にとっておくような場合に使います。

とうぜん、その後の使い方が違います。溜めるのは、ふつつすぐ使うためです。貯えるのは、ふつつ当面は使わないでおくためです。

先の訳文にもどって、その後を予想してみると、田中友子氏の訳の場合では、なるほど「いざつていうとき」に使うのであって、当面は魚を食べません。そのため、くちばしは魚を捕らえるためには使えないでしょう。

私の訳の場合は、十分に魚を溜めたら、すぐに食べます。くちばしは魚を捕らえるためにいつでも使える用意があります。



簡略版より

P・ブーチキンの簡略版の挿絵（1925年）。下顎からたれさがる袋を魚でいっぱいになっている。

### 文脈にそぐわない、くちばし倉庫説

くちばしのような重要な器官の機能は一つとは限らず、幾とおりに使われることも

普通です。でも、この物語ではくちばしを摂食器官と見て、その形態の特徴と主要な機能である食物を入手し食べる方法を取り上げています。そもそも、この物語の筋はヒタキがいくら虫をとつてもお腹がすくっぱなし、と嘆いて、確実に容易に食物を手に入れることができる鳥をうらやましがって、始まっています。

「魚をつかまえたら・・・とつておく」という訳文では、貯蔵して何にどう使うかが分からず、文脈にびったりしません。しかも、魚はくさりやすく、長期の備えになり得ません。では、短期的であつて、いざという時のための貯蔵とは、どんな事態なのか、それが分からなければ意味のない訳文になっています。そして、じつは私には難に餌を与えるため、ということぐらいいしか思い浮かばないのですが、それはいざという時とはいわないでしょう。

しかし、もともとくちばしに魚を貯えるなど、あり得ない想定であつて、論じることがすでにこつけいに思えます。すなわち、物語の中に倉庫説があること自体が問題なのです。

## 2 編集部の対応

### 先訳と照らし

### 合わせたのでしょうか

編集部も訳文に問題を感じたことは明らかです。すでに触れたとおり、巻末の1ページに「編集部より」と題する注意書きがあつ

て、ペリカンの項の問題をあつかつています。けれどせつかくの注意書きなのに、曖昧な文章での確に問題をつたえています。そのことが事態を複雑にしており、編集部も適切な判断できなくなつた原因ではないか、と指摘したいと思えます。

私の場合は、最初に「編集部より」の文章の前半にある「底本を変更したため・・・『くちばし』と変わっている点があります」で困惑しました。原文が違ふかもしれず、『くちばし』の文章と比べることができないのです。それでどうしたかは『ネバーランド』8巻に書いたので省きますが、手間ひまをかけて、ペリカンの項は二つの版の原文が同じであることを確かめました。編集部の人たちは同じであると分かっているのでしょうか。

この注意書きは読者が『くちばし』と読み比べる意欲を失わせることになりかねません。親切な注意書きにして欲しいと願っています。

田中かな子氏による『くちばし』のペリカンの項の核心部分を見ておくことにしましょう。

それじゃ えさを ためようがないじゃないか。(3)

わたしはね、ほら、さかなを とると、それを ふくろの そこに ためておくんだよ。そして、また とつては ためるのさ。(4)

そうこのようなものね。もう これより

べんりなものは ちよつと おもいあたらないわね。(8)

田中かな子氏の訳文は、田中友子氏の訳文と意味も文脈も違います。3では、田中友子氏の訳文が「貯える」といつているのに対して「溜める」です。4は、溜める手順の説明で、捕つては溜め、捕つては溜める、といっています。新たに捕つた魚を加えてどんどん獲物を多くしていく、という意味で、捕ることと溜めることは組み合わせさつて一つの意味ある行動になることの説明です。基本的には私の訳と変わりません。大量の食物を必要とする、大きな体のペリカンにふさわしい漁の仕方の紹介です。

一方、田中友子氏の訳文の3の文章は、捕るのと貯蔵の二つの機能がある、という指摘です。

ペリカンはくちばしをあけて、ヒタキたちには袋の中を見せます。それに対するヒタキの感想が6です。田中友子氏訳では、「まるで食べものの倉庫みたいね」とあり、田中かな子氏訳では、「そうこのようなものね」とあつて、同じようではあつても、文脈の違いから意味が違います。

前者ではペリカンが「貯え」といつているのですから、もともと倉庫そのものであつて、ヒタキが「倉庫みたい」とは少し意味をあいまいに受け止めたことになりました。後者では、ペリカンは魚を溜めて食べようとしていただけですから、「倉庫みたい」とはあくまでもヒタキの印象です。魚が大量に捕れたことへの驚きと整然と並んでい

るさまを表現していて、ヒタキも倉庫そのものとは違っていません。

以上のとおり、田中友子氏の訳は、先訳と意味がはつきり違い、文脈と矛盾し、物語の性格にも大きく影響する文章になっています。そこで、先訳との照らし合わせを編集部がしたのかどうか、両者の違いについてどう判断したのが問題です。しかし、「編集部より」は先訳にふれず、田中友子氏の訳が適切という前提で書かれています。自社の出版物に対する適切な評価があれば、訳の退行を招くことなどあり得ないでしょう。

### 3 校閲者の意見

#### 誤りを指摘、根拠は貧しい

編集部は、ペリカンの項の内容を「この場面で、「ペリカンは、くちばしの袋に魚を入れてとっておき、倉庫のように使っている」という内容の表現になっています」と要約しています。「しかし、今日では次のような点が明らかにされています」と続けて、「ペリカンのくちばしの袋は魚をとるための網のように使われており、魚はすぐに胃の方へ飲み込まれる。したがって、倉庫のように使われる訳ではない」と断定しました。

この断定は校閲者が、鳥学の専門家によっているのでしょうか。田中友子氏訳によるペリカンの項の最重要のポイントであるペリカンによる食物の貯蔵ばかりか、この項の

ほとんど全文を否定するものです。

このくちばし倉庫説の否定は、結論としては私も同じで当然です。でも、くちばし倉庫説の否定のための理屈としては、十分ではないのは明らかです。

くちばしの袋が網のように使われたとしても、くちばしの機能は一つとは限らず、倉庫にしない、とはいえませんが、また、魚はすぐに胃に飲み込まれたとしても、貯蔵しない、とはいえませんが、リスはクルミを拾ってすぐに割って食べますが、つぎに拾ったクルミは穴を掘って埋めることもしばしばです。

私は「今日では」という言葉が気になりました。この言葉は、ヒアンキの執筆当時、1924年かそれ以前と今では科学の進歩が違う、という考えによるのでしょうか。でも、くちばしの袋が魚をとるための網のように使われているのはとうの昔から分かっています。つまりは、今日の科学の進歩の中身とは「すぐにのみ込まれる」という一言でしかなく、冗談ではないかと驚くほど貧弱です。

#### 今日の本能の理解

食物の貯蔵行動についての、ヒアンキの時代になかった新しい理論といったら、コンラート・ローレンツによる動物の本能的行動（魚の貯蔵もその一つです）の研究でしょう。今日の本能の理解は、ローレンツをはじめとする動物行動学者が1940年前後に確立した理論によっています。

それは、食物の貯蔵行動であれば、例えばリスは、クルミなどの好みの食物を見つけたら、貯蔵の衝動を解発されて（解き放たれて）、口にくわえて運びたくなり、地面に穴を掘りたくなり、そして埋めたくなり、という、遺伝的に決まった行動をとる、という理解です。

動物が貯蔵をするとしたら、それは貯蔵の衝動を生得的に持っているため、それを解き放つクルミという解発刺激によって、貯蔵行動が引き起こされる、と理論的に理解できるようになったことが、1924年かそれ以前と今日の違いでしょう。

つまり、魚を食べる食事行動とは別個に、魚を貯える食物貯蔵行動の衝動をペリカンの持つているかどうかの確認が問われます。魚がすぐに胃に飲み込まれるという事実は、貯蔵とは無関係です。

この理論によれば、食事行動と食物貯蔵行動は別個の衝動によっており、したがってもしペリカンの貯蔵行動の衝動をもっているなら、適切な刺激があれば、食物を貯蔵します。そして、貯蔵行動の衝動があるかどうかは、理論から導きだせません。野外観察によつてのみ実証できます。

ローレンツの理論があつても、現実にものを知らするための手続きは何も変わってはいません。

ローレンツの理論は『ソロモンの指環』（ドイツ語原本は1949年、日本語版は1963年、日高敏隆訳、早川書房）で、彼が飼って研究した動物との交流の体験と共にやさしく説かれ、人々の動物観を変え

ました。特に人に飼われている動物の理解に貢献した、といえます。

しかし、私たちは新しい理論の華々しい登場に目をうばわれて、判断のバランスをおかしくしています。ローレンツの理論は無から生まれたワケではないのですから。二十世紀初頭のシートンの動物文学に着想を得ていることは明らかであり、本能の本質の理解についていえば、それ以前のナチュラリストの思想を継承しています。

例えば十八世紀のビュフォンの自然誌がそれです。ビュフォンは『鳥の博物誌』（1770～1783）の中で今、ここで論じているペリカンの漁を観察した経験を、見ていて楽しくなるといつて、詳しく報告しています。

そして、漁の行動を分析し、すくつては溜め、すくつては溜め、すぐにはのみ込まず、袋をいっぱいにした後、食事場に引きあげて食べる、そして、長い時間をのびのびと休息して過ごし、また高く舞い上がって人々を魅了する、としています。「すくつて」とは、飛ぶ前にはのみ込む、という意味でしょう。

私たちにとっていま重要なのはビュフォンが「はじめはすぐにはのみ込まず、食事の準備のために魚を溜めつけ、やがて、食事にとりかかる」と食事の本能行動の特徴をとらえていることです。つまり、魚を捕らえる本能と食べる本能が分離していることを鋭くとらえました。そこで、飼つて漁に使つてはどうかと提案し、伝え聞いた中国での事例まであげました（中国語の鵜

はペリカンのこと）。この分離の考えは今日、ネコの狩りの行動の分析に使われています。

当時は学問のための純粋な理論化は強くは求められておらず、またビュフォンは自然誌の知識や理論を直接、人間生活に役立てることを目指したのですから、この提案がビュフォンにとつては、ペリカンの獲物捕獲行動から帰納した本能理論であり、ローレンツの理論の原型と見ることが出来ます。

すなわち、自然から直接学ぶナチュラリストの伝統、ひいては人間本来のものの知り方にもつと目を向けよう、というのがビアンキの考えではないでしょうか。

## 4元の木阿弥の編集部

### 混迷を深める

くちばし倉庫説の間違いを注意書きに明記しながら、編集部は強く訳者に再検討を指示できなかったようです。注意書きにこう続けて書きました。

「この作品が書かれた当時（1924年）は20～21ページのように理解されていただろうと考え、これに変更をくわえないでそのまま訳しています」

20～21ページとは、ペリカンの項の文章が書かれた見開きです。田中友子氏の訳文の通りの理解、すなわちペリカンはくちばしに食物を貯蔵する、という理解が192

4年かそれ以前にあった、と思いきつたつじつま合わせをしました。

この解釈はビアンキの評価にかかわるもので、見過ごすことはできません。それも、「20～21ページのように理解されていただろうと考え」と、仮定を含みながらの「考え」であつて、きわめてあいまいな判断です。もし、作品が書かれた当時、くちばし倉庫説がなかったらどうするのでしょうか。

私はすでに、ビュフォンの昔からそんな説はなかった、とほぼ証明したも同じです。ビュフォンの観察によれば、ペリカンはくちばしの袋に十分な魚を溜めたら、すぐに食べてしまします。そして、一日に午前と午後の二回、漁にでる、と書いています。ペリカンの群れの中でくちばしに魚を貯えているものは、一羽も観察されていません。十八世紀の理解です。くちばし倉庫説が成り立つ前提がくずれています。

編集部がいう1924年当時というなら、スミソニアン博物館の年報の121巻（1922年）にペリカンの生活史の総括が掲載されています。執筆者は、数あるペリカンの獲物捕獲行動の報告の中でもつと優れた記録は、1888年のグロスによる記述である、として引用しています。

その内容は豊富かつ詳細ですが基本は、ビュフォンの記録と一致しています。すなわち、ヨーロッパ、インド、北アメリカで、ペリカンは同じように魚の群れをおい、すくつては袋の底に溜めて、袋を大きく膨らませていました。そして、全員がすぐに魚のみこみ、袋を小さくしていたのです。



編集部のいう「作品が書かれた当時（1924年）は20〜21ページのように理解されていた」とは、20〜21ページに展開された田中友子氏訳の文章の意味を編集部が「ペリカンは、くちばしの袋に魚を入れてとっておき、倉庫のように使っている」と要約したように、ビアンキが理解していた、という意味でしょう。

その意味であれば、ビアンキが詩人・ナチュラリストであることだけでなく、くちばし倉庫説をとなえることはない、と断言できます。（私は主語がないこの文章に長く惑わされ、当時の社会が広くくちばし倉庫説を受け入れていたともとれる、と考えていました）。

ビアンキがアルタイのビースクですごした1920年前後の4年間、そこはペリカンの生息地で、どこでも見られたのです。そして、アルタイ山脈の山麓地帯は今日もペリカンの生息地として知られ、なお1万〜2万羽が生息します。たえず探検を続けたビアンキが見ていないはずはなく、ビアンキもまた、ビュフォンが見たとおりのペリカンの漁を見たでしょう。

ビアンキはその感動をこの作品で語っているのであって、詩的な表現は感動がなければ不可能だったでしょう。私はその文章を訳し、そしてそれからしばらくして、ビュフォンが、ライデッカーが、またグロスが同じことを見て、書いているのを知って感動しました。

もちろん、今日の観察者も基本的には同じ漁の行動を記録していますが（私は古い

記録より、「こちらを優先してみました」、分布域を格段にせめられ、管理されたペリカンの生活は厳しく、八トを食べた公園のペリカンの報告をはじめ、人間との接触が異常行動を多く引き起こしている様相が伺えます。この作品のビアンキの記述は、記録としての価値も高いといえます。

## 5 読者はどうなる

### 私も読者

私が知り得た限りでは、「編集部より」にあげられた、くちばし倉庫説を否定する文章「ペリカンのくちばしの袋は魚をとるための網のように使われており、魚はすぐに胃の方へ飲み込まれる。したがって、倉庫のように使われる訳ではない」は、『動物大百科7 鳥類1』（平凡社）の「ペリカン、カツオドリなど」の項にある、次の文章に似ています。

「（ペリカンの）のど袋は魚を捕らえるために、たも網として用いられ、魚はすぐさま胃にのみ込まれる」（E.A.シュライバーとR.W.シュライバー著、長谷川博訳）。

ただし、この文章の後には「したがって、倉庫のように使われる訳ではない」という倉庫説を否定する文言はありません。

というのは、この文章は、有名なペリカンについてのユーモア詩、ディクソン・ラニア・メリット（Dixon Lanier Merritt 1879-1972）のリメリック（五行戯歌、1910年）を引用し

て、詩に書かれていることとは違うが、ペリカンが魚でくちばしをいっばいにしても、すぐに飲み込むことの利点を述べた文章だからです。胃が体の重心にあることから、重い魚をくちばしの袋から移すことで、バランスをくずすことなく飛べるといっわけです。

引用されているメリットの詩は五行詩の内の二行で、「くちばしいっぱいのためにこんだ餌で、1週間は食べずにいられる」と訳者は訳しています。著者シュライバーは、メリットの詩のこの二行には反するが、「魚は一刻ものど袋にとめおかれぬ」と書いているワケです。そして、先の引用の文章に続きます。

メリットの詩はユーモア詩であって、訳文で「くちばしいっぱいのためにこんだ餌で、1週間は食べずにいられる」とあるのは、原文ではHe can take in his beak Food enough for a weekで、「くちばしの袋に一週間分の食料だつて入る」となっています。これは、ペリカンの胃が一週間かけて消化するだけの食料が口に入ってしまう、という意味の仮定の話です。それも正確な量が問題ではなくて、胃の能力を超えた大口つて何だろう、という問いかけです。

川で砂金をあさる升が、砂金にくらべてはるかに大きいと同じように、ペリカンのフクロハシが獲物である魚にくらべて大きくて当たり前であり、口の大きさを胃の能力とくらべるのはナンセンスです。

しかし、メリットの詩はナンセンスのお

もしろさで、ペリカンの大きな口に着目させ、食物（お金）獲得への人の欲望を口の大きさであらわしたらどうだろうか、といっています。将軍、政治家、資本家がどれほど大きな口をしているか想像してみれば、と笑いを誘っています（メリットはコックとして軍務についた経験から、いつも腹を空かせた兵士を励まそうと、詩を書きました）。

けれど、シュライバーが引用したのは、五行戯歌の3行目と4行目だけです。そのため、日本語訳の訳者のこの詩の扱いはあいまいで戯歌の性格がでておらず、読んだ人がペリカンはくちばしに食物を貯蔵する、という説があつたと解釈しても、あるいは、その説が否定されたと解釈しても不思議はありません。

このように、曖昧な文章を読むと人はさまざまに頭をめぐらします。

『くちばし どれが一番りっぱ？』の読者は本文を読み終えて、巻末の「編集部より」のあいまいな文章に目を通すことになるでしょう。くちばしが倉庫という考えは間違いといわれ、でも昔はそう考えられていたらしいから、そのままにしてある、では困惑し、ピアンキへの信頼も揺らぐかもしれません。あるいは、注意書きに目を向けたい読者もきつといます。子どもの読者が読めるようには、書かれてないのですから。そのような読者は自分が迷子になったことも分かります。

それにしても注意書きの曖昧模糊は奥が深く、私はその迷路にはまり込んだ、と告

白します。迷子になった私は、いつのまにかピアンキの詩のような文章の広さと深さに導かれていました。私は真のナチュラリストの作品と向き合っている、と知って自分をとりもどすことができました。

## ねー、この本読んだ？

『プアー』（長新太・さく・え 和田誠・しあげ 840円 福音館書店）



「この絵本は、長新太氏が亡くなる数ヶ月前に描いたラフスケッチに、和田信氏が色をつけて完成させました」と、巻末の頁に説明が書かれていました。

同時に発売に『わんわん にゃーにゃー』（長新太・さく・え 和田誠・しあげ 840円 福音館書店）があります。頁をめくるたびに「プアー」と言う言葉とともに犬のどこかが風船の用に膨らみます。長さんならではのナンセンスを楽しんでください。

『あまがえるさん、なぜなくの？』（キム・ヘウオン・文 シム・ウンスク・絵 池上理恵・チェ・ウンジョン・共訳 1575円 さ・え・ら書房）



とをやる「あまのじゃく」のようななかえるの子の話。反対のことはかりしている「ぼうや」を心配する余り、母さんガエルは死んでしまします。最後に母さんは、きつと反対なことをするだろうと「川のそばに埋めて」といいのこしたのですが・・・。絵も素朴でユーモアがある。見返しのかえるたちは、みんなが向こう向いているのに一匹だけこちら向き、後ろ見返しではみんながこちら向きなのに一匹だけ向こう向き。「坊やは本当にあまのじゃく」なんだから。

『おばけのおつかい』（西平あかね・作 840円 福音館書店）

こどものとも絵本「さくぴー」となるほうのおはなしシリーズ 主人公がオバケだから、空を飛ばす場面が何度か描かれています。この俯瞰的な場面の細かい絵に楽しみを見つけているのも、この絵本

韓国の家庭で語り継がれてきた昔話。かあさんが言うこととは何でも反対のこ

の人気の一つではないかしら。今回はさくぴーとたるぼうが空を飛んでおつかいにいきます……。

『おおきくおおきくおおきくなると』(佐藤ひとみ・文)

藤ひとみ・文

谷口靖子・

絵 1680

円 福音館書

店)



これはちよつと変わった絵本です。物語としては背の低い1年生のゆうきが自分の背の低さに

コンプレックスを抱いているが、自分の影法師の魔法によってだんだん大きくなっていき、最後は地球と同じぐらいにまでなるという話ある。その過程で、ゆうきはもの大きさは相対的に見るとことと、絶対的大ききの違いを自覚するのである。比較のたとえなど、とても意表を突いていて面白い(科学的でもある)。いつしかもの大きさを比較するおもしろさの世界で遊んでいる。

『アイヌ式エコロジー生活 治造エカシに学ぶ、自然の知恵』(さとうち藍・著 関戸勇・撮影 1575円 小学館)

著者は北海道を離れ首都圏で暮らすアイヌのエカシ(長老) 治造氏に長期にわたって密着取材し、先住民であるアイヌの暮ら

しの知恵や考え方を紹介している。アイヌは人間以外のす



アイヌ式エコロジー生活  
治造エカシに学ぶ、自然の知恵  
さとうち藍/著 関戸勇/撮影

べてはカムイ(神)とし、敬意と感謝の念を抱いて暮らす。取材する過程で、さまざまな行事やまつりご

との中に、アイヌの考え方世界観に共感する著者は、アイヌの生き方にこそ人間本来の生き方を見いだしているのだろう。これはアイヌに留まらず、世界の多くの先住民族の生き方とも共通している。現代の私たちも知る必要のあることだ。

宇梶静江さんの講演と弓野恵子さんのカムイユカラで知る先住民文化

## 絵本から知るアイヌ文化

古布絵ってしってますか?カムイユカラって聞いたことありますか?

十月四日(土) 午後1時~4時半

アイヌ刺繍教室(コースター制作予定)

講師 宇梶静江さん

材料などの準備の都合がありますから、参加定員は三十名で締め切ります。(なお、親子での参加も可能です。この場合は親子

で一人と数えます)

十月五日(日) 午後1時~4時半

宇梶静江さんの講演と弓野恵子さんのカムイユカラ

宇梶さんは自作の絵本を通して、先住民アイヌの文化や生き方を語り、弓野さんはアイヌ語弁論大会で優勝した実力で、美しいカムイユカラとアイヌ語で絵本の読み聞かせもしてくれます。

会場 清水テルサ6階研修室

JR清水駅東口(海側の出口)すぐです。

参加費 600円(会場費として)

これは1日ぶんです。2日とも参加の場合は1200円です。ただし、親子で刺繍教室に参加の場合は1組800円材料費もすべて含みます。できた作品はお持ち帰りください。5日の講演会とカムイユカラの方は定員は九十名です。

主催 静岡子ども文化宇宙船

お問い合わせと申し込みは 子どもの本専門店 ピッポまで 0541-3451546  
0 か ton@pippo.co.jp まで連絡を!

宇梶さんの絵本は現在『シマフクロウとサケ アイヌのカムイユカラ(神話)より』『セミ神さまのお告げ アイヌの昔話より』『古布絵制作・再話・宇梶静江』『トーキナ・ト アイヌの神話』(津島佑子・文 宇梶静江・刺繍)の3冊が福音館書店より出版されています。当日この絵本の元になっ

た古布絵を会場に展示いたします。尚、会場での3冊の絵本も販売いたします。

## 講師プロフィール

### 宇梶静江さん

1933年北海道浦河郡生まれ。若くして上京、さまざまな社会運動に関わりながら、詩作を続ける。1972年朝日新聞の投書欄に、「ウタリ（同胞）よ、手をつなごう」と呼びかけ、大きな反響を呼ぶ。東園のアイヌ復権運動の草分けとなり、東京ウタリ会を結成する。1996年アイヌ刺繍を学び、アイヌの精神世界を表現する「古布絵」を編み出す。詩情豊かな表現に満ちた作品は海外でも高く評価され、2004年アイヌ作品コンテストで古布絵作品がアイヌ文化奨励賞受賞。各国先住民族との文化交流や国内外での講演活動を行っている。

(GRAPHICANON0157)より

### 弓野恵子さん

北海道浦河町出身、現在は千葉県在住。不当な差別が多かった北海道を離れ十七歳で上京。結婚し子どもを育てた後、あるアイヌ女性の誘いで、アイヌ刺繍、料理の会にでるようになり、2002年からアイヌ語を学び、2007年にはアイヌ語弁論大会で最優秀賞を受賞。幼い頃の祖母のアイヌ語の語りやイフンケ（子守唄）が蘇り、現在はアイヌ文化に誇りと喜びを感じている。母は、アイヌ文化伝承者の遠山サキさん。各地の講演や刺繍講習などに出かけ、アイヌ文化を伝え、アイヌの復権を願って

いる。

## カムイユカラ

自然の中のカムイが、一人称で語る物語です。世界の口承文学の中でも、すばらしい神謡の一つとして知られています。アイヌ（人間）にとってカムイ（神）は、全知全能の神ではなく、人間と対等の、とても親しみある存在です。火のカムイ、水のカムイ、大地のカムイなどは、私たちの暮らしの中にも共存しています。生きものたちのカムイ、たとえばシマフクロウのカムイ、クマのカムイなどが物語を語っていきます。アオバズクやスズメのカムイも、ユカラの中には登場するのです。言葉の響き、音楽のような語り、口承文学の素晴らしさを、ぜひ聴いてください。（弓野恵子さんのプロフィールと、この項は、さとうち藍さん）

## おじさんの雑記帳

ピッポ古書クラブが初めて、デパートの古書展に出店します。時は十月下旬から十一月はじめまで。（正確な日時は忘れましたので次号でお知らせしますね）ところは松坂屋静岡店の特設会場（これも何階か忘れましたので次号で）です。ですから、おじさんはその目録作りに八月から取りかかる予定です。（そう予定なんです）。これまで古書展の目録は良く目にしていましたが、自分が古書の目録作りをするのは初めてです。こんなことをやると自分も古本屋なのだと思覚が出てきました。この古書展のために、ラベラー（値段を貼る道具で、貼るときカチャ

カチャ音がする）も新品を送料込み3千円（ただし中国製）でネットで買いました。ピッポと名を入れてもらったラベルも作りました。こちらは1万2千円でした。大きな投資です。だから皆さん！ぜひぜひ来てください。子どもの本中心の出品ですが、一般書も出品します。ご期待を！

今泉さんの3回目いよいよ佳境に入ってきました。それにしても今泉さんの読みの深さにはますます驚かされます。と言つよりも、ものを考える姿勢がとても参考になります。今回は作品上において、「貯える」と「溜める」似て非なることがとても良く理解できました。専門家としての科学的な知識の裏付けは当たり前としても（これだつてその知識の豊かさには敬服です）、もっとすごいと思つたのは、その理論が空論などではなく、子どもの時から育まれてきた自然に対する真摯な見方や考え方で裏打ちされているのです。母親に作ってもらつた手拭いの袋だもでミを捕る話や、網で魚をすくった経験から、ペリカンのくちばしの「捕らえて溜める」役割を説明していることなどは、ほく自身もそのことを経験して育つたので、とても良く理解できるのです。もう一つ「溜める」と「貯える」ことの質の違いの説明では、山小屋での水の確保のことが出てきました。が、ぼくはこのことは今泉さんから直接その経験を伺つたのです。今泉さんは中学の時に八ヶ岳の赤岳の頂上小屋でバイトをしたそうで、そのときの水くみを思い出したのだそうです。ポチヨポチヨ落ちる岩からの水滴を「溜めて」、小屋まで運び揚げて使う。山をやるべくにはこれも良く理解できた。今泉さん自身がすぐれた現代のナチュラリストなのです。